

新 除 草 剤

アンモサイド

DE-642-A粒剤

石原産業株式会社

性状・作用特性：本剤の主成分は、2・4・6-トリクロロフェニル-4-ニトロフェニルエーテル(CNP)と、2-メチル-4-クロロフェノキシ酢酸アリル(AM)との混剤である。製剤はCNPを7%とAMを1%含む粒剤である。

本剤はノビエその他1年生雑草に有効なCNP(MO-338)と、マツバイ・一年生広葉雑草に有効なAMを混合した水稲本田初期土壌処理用除草剤である。各単剤に比べて、広範囲の雑草に対し高い殺草効果を示す。すなわち、ノビエその他一年生雑草及びマツバイに有効である。特に発芽時または発芽初期が有効で、生育の進んだものには劣る傾向にある。

水稲に対する薬害症状は、低温・漏水条件下ではロール葉・生育抑制・株開張がみられるが後に回復し収量にまで影響することは殆んどない。

魚貝類に対する影響はない。また人畜に対しても殆んど無害である。

使用方法：普通期栽培の水稲に対して、暖地では移植後4～7日及び中耕後、寒地では中耕後に湛水下で土壌処理をする。散布量は10アール当り製品3kgを均一に散布する。

移植後処理では、稲が活着してから散布し、雑草の発芽時～発芽初期に処理する。なお、北海道においては使用しない。

土壌については日減水深3cm以下の壤土～埴

土において使用する。本剤は粒剤であるので効果を十分に発揮させるため、散布時からその後3～4日間は水深を3～4cmとし、かけ流しは避ける。また、軟弱苗の使用・稲体がぬれている場合には使用しない。

MO-401粒剤

三井化学工業株式会社

性状・作用特性：本剤の主成分は、2-メチル-4-クロロフェノキシ酢酸(MCP)と、2・4・6-トリクロロフェニル-4-ニトロフェニルエーテル(CNP)との混剤である。剤型はCNPを6%と、MCPを0.8%含む粒剤である。

CNP(MO-338)の作用はよく知られている通り接触作用の強い非ホルモン型移行型土壌処理剤で、水田一年生雑草の発芽前～発生始期に高い殺草効果を示すが、コナギ・マツバイに対する効果の劣ることが欠点である。この欠点を補うためにMCPを加えて有効対象雑草の範囲を広げたものである。

雑草種類に対する選択殺草性は、一年生イネ科・広葉雑草及び多年生雑草のマツバイと殆んどどの雑草に対して高い効力をもつ。しかし、生育のすすんだ雑草にはやゝ劣る傾向にあるので処理適期幅はやゝ狭いとされる。

一方、土壌中の移動性は小で、残効期間は湛水条件下では比較的長い。また温度条件による効力差は少ない。水深によりノビエ殺草効果は異なり、深水の方が効果大である。

水稲に対する薬害症状については、極端な深

新 除 草 剤

水下で植付苗が水没するようなときは接触害がでる。また、漏水条件が大きい場合には、主にMCPに起因する生育抑制・ロール葉・茎数抑制・株開張等の症状が現われることがあるが、後に回復し、収量に影響することは殆んどない。

人畜毒性は極めて低く、またラッテ径口毒性はLD50が10,800mg/kg以上、魚毒性はコイで48時間、TLMが290ppmと極めて低い。

使用方法：普通期移植水稻の移植後5～8日及び中耕後湛水土壌処理用としては、10アール当り製品3～4kgを均一に散布する。

本剤の処理適期は、雑草発生始～盛期であるので、ノビエ1～2葉期頃までに湛水状態で均一に散布する。適用土壌（条件）は、砂壤土～埴土で日減水深3cm以下と広域にわたり使用できる。また、極端な深水・浅水時の使用は避け、散布時～散布後3～4日間は3cm程度の湛水状態を保ち、かけ流しは避ける。また稲体のぬれている時、軟弱苗の時は使用を避ける。

スエップ

MCC水和剤

日産化学工業株式会社
日本農薬株式会社

性状・作用特性：本剤の主成分はメチル-N-(3,4-ジクロロフェニル)カーバメイトで、剤型は40%水和剤である。

本剤の作用特性は、移行性作用力大きい、やや接触的作用性をも併わせもっている。茎葉処理での選択殺草性はDCPAよりやや小さく、ノビエに大、イネに小でいわゆる属間選択作用

性をもっている。土壌処理では中程度の選択殺草性となる。従来のカーバメイト系除草剤と、著しく作用性を異にしている点の特徴である。したがって、雑草処理能力と、土壌処理能力とを併せもっている特筆すべき除草剤である。

雑草種類に対する殺草性は、雑草発生前の土壌処理及び雑草幼少時の雑草処理の何れの処理においても、ノビエ・メヒシバをはじめとするイネ科・広葉の各種一年生雑草に対しすぐれた効果を示す。

土壌中の移動性は小～中であり、効果の持続期間が極めて長いので、乾田直播水稻の乾田期間雑草防除及び陸稲など対象では、播種直後～イネ出芽揃期までの間の1回処理のみで効果高く、その後のDCPAなどの追加使用は省きうる。また、その間の処理では、作物に対する薬害の心配もない。また本剤は処理後に降雨があっても効力は殆んど低下しないことも特徴である。

人畜に対する毒性は殆んどなく、かつ低魚毒性の除草剤である。

使用方法：乾田直播水稻・陸稲に対し、播種直後～イネ出芽揃期に（イネ0.8葉期まで）に10アール当り1,000～1,250gを、畑苗代には播種直後に500～750gを水70～100ℓに稀釈して、均一に散布する。

イネ出芽揃期の処理は、イネの第1葉が未展開で垂直に立っている時期までに散布することが、薬害回避のために必要である。また、播種前にジメトエート粒剤を土壌処理してある場合は、本剤の使用を避ける。ただし、本剤を前記期間に処理した場合は、処理後1週間経過すれば、有機リン剤やNAC剤を散布して差し支え